

[2] 0091 偶然二首一

楚懷邪亂靈均直

放棄合宜何惻惻

漢文明聖賈生賢

謫向長沙堪歎息

人事多端何足怪

天分至信猶差忒

月離于畢合霧電

有時不雨誰能測

楚懷は邪亂にして靈均は直なり

放棄せらるるは合に宜なるべく何ぞ惻惻せん

漢文は明聖にして賈生は賢なり

謫せられて長沙に向ふは歎息するに堪へたり

人事多端何ぞ怪しむに足らん

天分至信にして猶ほ差忒す

月畢に離れば合に霧電たるべきも

時に有りて雨ふらず誰か能く測らん

(本文・訓読ともに新釈漢文大系『白氏文集(三)』四三八〜四三九頁より引用する)(傍線筆者)

この二首より見えてくることは、「賈誼」の方が「屈原」より悩みが深かったと詠んでいる点である。それは、「屈原」「賈誼」の仕えた君主の相違からくるものと根拠を示す。

それは屈原が「楚の懷王」という人徳のない君主に仕えていた故、『史記』に「屈原があればほどの資質をもち、ほかの諸侯のところに行っていたら、どこの国でも容れられたであろうに(屈原以彼其材、游諸侯、何國不容) (屈原賈生列傳第二十四)」との言があると思われるに對し、賈誼は、人徳があり聡明な「漢の文帝」に仕えながらも、その文帝が取巻きの言に惑わされ、賈誼を長沙に左遷してしまった、その犠牲者である賈誼の苦惱は、